



83  
まいん

# ちょうじょう 頂上タンク



頂上タンク

## ちょうじょう 頂上タンク

は、頂上地区に設置されている貯水用のタンクのことで、2基あります。左側が真水用、右側が海水用でした。

一滴一滴の大切さを語る  
命の水

四阪島では、湧水がほとんどなく、真水は全て新居浜側から船で運び、ポンプアップして頂上タンクに貯水しました。それを各集落までパイプを引いて落差を利用し排水していました。

また、海水は防火用水として海岸よりポンプアップして貯水し、消火にあたりました。

各家庭の飲料水は割当量が決まっていました。昭和10年代では家族5人の1日の割当てが一斗(約18リットル)でした。

また、昭和20年代前半まで水の配給を受けるのは子供の役目でした。各社宅の要所に水渡し場があり、登校前の早朝に行っていました。水渡し場のおじさんに木札を渡し、数量に応じて『正』を記入し、水の配給を受けていました。

しかし、天秤棒でバランスをとりながら階段を下りる時など、子どもでは水桶の底がつかえて水がこぼれて大変でした。また、雨の日にカッパを着ての水くみも大変でした。



給水を待つ人々

昭和25年頃 別子銅山記念館所蔵



水くみに行く子供たち

昭和33年撮影 別子銅山記念館所蔵

さらに、冬の朝などは、まだ夜が明けきれていない中を水くみするため、こぼれた水で地面やカラミの階段は、凍りついて危険でした。水くみ場から遠い所は、何度も休憩しながら運びました。

このようにして運んできた水は、大きな水がめに溜めて、大切に使用しました。

昭和27年～28年ころからは、客船を兼ねた水船が船底に真水を積み込むことで量的に余裕ができたため、各家庭に水が行くようになりました。

現在でも、水運搬船にて1回500トンの水を新居浜から1日2往復で運んでいます。

